遠山記念館だより　第56号

小倉遊亀筆「菜」

【現在の作品データ】
絹本彩色　軸装　56.1×68.4cm
右下に：古徑、白文方印（古徑）

◇◇◇ 館蔵品紹介 ◇◇◇

当館の所蔵品として、小林古径筆「白菜」という作品がありました。過去形なのは、現在は所蔵していないからではなく、作者が変わってしまったためです。事の起こりは、東京国立近代美術館の主任研究員である鶴見香織氏に情報をいただいたことでした。美術雑誌『国画』1942年（昭和17年）５月号に「白菜」が掲載されている。ただし、小倉遊亀の作品「菜」として。似た作品が、ではないことが大問題です。確認したところ、ご指摘のあった図版と当館の「白菜」の画像は、無情にも細部までぴたりと一致しました。と同時に、「菜」の本紙右側数センチが断ち切られている事も判明したのです。その部分には、本来の作者、小倉遊亀の落款がありました。不本意ながら、犯罪がらみのお話になることが確定です。

『国画』に掲載されたモノクロ図版には「（日本美術院同人軍用飛行機献納作品展出品）」の説明が付されていました。すべてが戦時色に染まっていく時代、芸術家たちも例外ではいられませんでした。1940年、横山

大観が「海山十題展」20作品の売上総額50万円を陸海軍両省に献納、それにより４機の戦闘機が購われたことは有名ですが、大観ほど規模が大きくないにせよ、同様の事柄は次第に増えていったようです。「日本美術院同人軍用飛行機献納作品展」もそのひとつで、日本美術院の同人が各２点作品を制作、昭和17年２月14、15、16日の三日間、谷中の同院で展観が行われました。その売上金額15万円に故富田渓仙の遺族から寄付された１千円を加えて、19日に陸海軍省それぞれに７万５千５百円を献納したと記録にあります（東京文化財研究所アーカイブデータベース）。小倉遊亀の「菜」という作品は、どうやらその内の１点のようです。

小林古径（1883－1957）と小倉遊亀（1895－2000）はともに日本美術院に所属し、活躍した人気日本画家です。古径は、前田青邨、安田靫彦と共に日本美術院の三羽ガラスと称され、遊亀は安田靫彦に師事しました。古径と遊亀は、一回りほど年が離れています。師弟関係なども含めて、一世代違う画家といって良いと思います。かなり大雑把ですが、昭和前半くらいの美術市場の記録をいくつか見ますと、古径作品は遊亀の作品の３倍近い値で取引されています。おそらくですが、1942年の雑誌掲載時から、出入りの美術商を通じて遠山元一が作品を購入するまでのどこかの時点で、「菜」はいわゆる悪徳美術商の懐を肥やすために「白菜」に偽装されたと思われます。作品が紙本であれば、和紙の特性を生かして表裏２枚に剥がし（「あい剥ぎ」と呼ばれる技術です）、絵が薄れた裏の方に補彩して二つの作品として売りさばく等といった、その根性に呆れればいいのか、技巧に感心すればいいのか迷うような事すら横行した時代、作品そのものが損なわれることなく、現在まで伝わったことは不幸中の幸いというべきなのでしょう。

それにしても、およそ半世紀もの間、小倉遊亀の作品が小林古径の作品として通用してきてしまったのは何故でしょうか。まず、この作品には小倉遊亀ら

『国画』1942年5月号掲載の「菜」

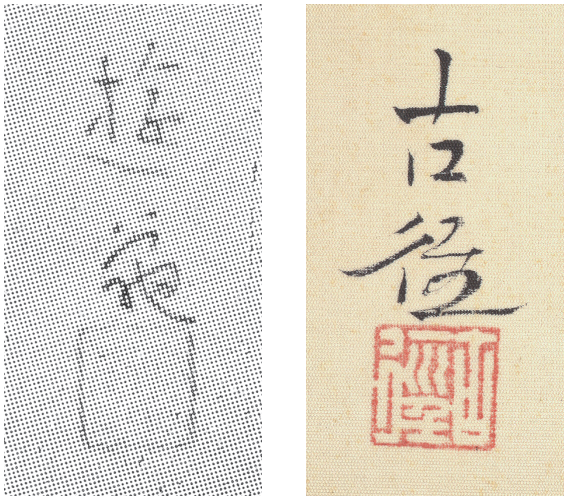
しからぬ要素があります。遊亀の静物画を何点か確認して頂ければお気づきになると思いますが、背景の処理、描線の性質など、遊亀の画業の重要な一ジャンルを成す静物画の中でも若干異質な印象を受ける一点なのです。次に、この作品の出来が非常に良いことがあげられます。葉物野菜の種類からして、季節は冬。それを薄いグレーのガラス鉢に入れるという発想。白菜と青梗菜、蕪の葉質の繊細な描き分けも美しく、菜類の根本部分と蕪の丸い根の部分がガラス器の大ぶりなカット面に写り込む様子がまた秀逸で、静物画なのに動きが感じられるような大変面白味のある作品に仕上がっています。人は、さして出来の良くない作品には疑念を抱きがちですが、巧いと感心して見ているかぎり、サインの微妙な下手さ加減になどなかなか気が向かないものなのかもしれません。

小倉遊亀の展覧会カタログを何冊か見ていて、興味深い一文に出会いました。1941年（昭和16年）、第28回院展に「観世音菩薩」という作品を出品した遊亀が、夫・小倉鉄樹に「お前さんにはまだあと十年観音様は描けないな」と言われたというのです。当時の遊亀は、院展の同人となって十年、中堅画家として地歩を固めていたはずでした。臨済宗の禅僧であり、師とも仰いだ夫にそう評されてしまった遊亀は、形だけの観音様をきばって描いていたのではないかと深く反省したそうです。1935年頃から兆しが見えたという表現の停滞の原因を、宇都宮美術館学芸員の濱崎礼二氏は院展の画風を意識しすぎたためではないか、と分析されています。ある種のスランプに陥っていた遊亀が、戦後、確固たる画風を開花させるまでのおよそ10年間、とくに1941年の鉄樹の指摘から終戦までの数年間は、試行錯誤しながら自らの表現を見定める時期だったのではないかと思われます。そのなかで生まれた、小倉遊亀らしさはあまりないけれど、優れた技量と鋭敏な感性を感じさせる静物画。それが「菜」という作品なのではないでしょうか。そう考えると、遊亀の静物画群では少し浮いてしまうこの作品も、その画業の流れの中に必要不可欠な１ピースとして居場所を見つけられるような気がします。

遊亀は日本美術院で育った画家としての誇りを持ちつつ、同じ院展の作家たちには敬意と共感を持ち続けました。なかでも、師である安田靫彦とともに、強い尊敬の念を抱いていたのが小林古径であったといわれています。古径もまた、愛蔵して作品にも登場させていた古九谷色絵草花大徳利を後に遊亀に贈っており、遊亀もその大徳利を題材として静物画を描きました。まさに確かな敬意と共感の絆で結ばれていたと思しきふたりの画家がこの顛末を知ったなら、何を思うのでしょうか。なんともやるせない心地がしてしまいます。

最後に小林古径筆「白菜」改め小倉遊亀筆「菜」の今後ですが、展示しようとすると、相応の説明と若干の気遣いが必要になります。贋作ではありませんが、真作に手を加えられてしまった偽装作品であるためです。とはいえ、伝世途中で不運に見舞われながらも作者がはっきりとしており、作品自体もきちんと描かれている優れた静物画です。何よりも作品部分に手が加えられていない事実は大きく、小倉遊亀作品としての再評価がなされ、将来にわたって多くの方たちに楽しんでいただけることを願っています。

（小野　恵）



小倉遊亀の落款（左）と現在の落款（右・原寸大）

〈参考文献〉

『国画』1942年５月号　塔影社

『東京美術市場史』東京美術倶楽部　1979年

『日本美術院百年史』７巻　日本美術院　1998年

『小林古径展』図録　東京近代美術館ほか　2005年

『没後10年小倉遊亀展』図録　兵庫県立美術館　2010年

『遊亀と靫彦』図録　滋賀県立近代美術館ほか　2014－2015年

遠山記念館蔵「瓢箪茶入　銘 閏」について

依田　徹

1　作品概要

遠山記念館で所蔵する「瓢箪茶入　銘 閏」（写真１）は、江戸時代後期に活動した大名茶人の松平不昧（治郷、松江藩主）所持という伝来を持つ。しかし不昧の所蔵品を記録した『雲州蔵帳』には、本作の記録がない。本稿では、この伝来の信憑性に留意しながら、本作の位置づけについて考察したい。

茶席の点前で抹茶を入れる小さな陶器製の壺「茶入」は、中国製の「唐物」、日本で模倣制作した「和物」と、産地によって大別される。またその形状によって、「肩衝」「茄子」「文琳」など、幾つかのカテゴリーに分類されている。本作は、愛知県の瀬戸市周辺で制作された「国焼茶入」で、上下と二段の膨らみがある形状から「瓢箪」に分類される。

総高は7.3cm、口径が2.8cm、底径が3.7cmと、一見して何の変哲もない小壺である。しかし上下に緩急をつけた轆轤引きが美しく、また口縁をわずかに捻り返し、腰の最も膨らんだところに「胴紐」と呼ばれる一条の沈線を廻らせている。底は糸で轆轤から剥がした後をそのまま残す「糸切り」ではなく、あえて中心から渦状に線刻を刻む「渦糸底」（図２）とし、また底部と腰に一段の段差を作る「円座」形とするなど、極めて入念な工作で作られている。

その「閏」という銘については、口元の捻り返しと胴の帯と、円弧が二回繰り返されることから、太陰暦において同月を二度繰り返した「閏月」に因んで命名されたとされる。

全体を覆うカサついた釉薬は黄味がかった褐色を呈し、その上から濃い褐釉が二重掛けされている。この釉薬の様子を「景色」と呼んで鑑賞のポイントとするが、本作は正面にやや乱れた様子の縦になだれている。釉薬は腰の所で止まり、下に赤味を帯びた黒い胎土が表れている。

本作は薄く挽き上げた轆轤挽きと、細部にまで注意を払った入念な整形、それに緻密な胎土が特徴であり、松平不昧『古今名物類聚』は「春慶」、高橋箒庵『大正名器鑑』は「藤四郎春慶」と分類している。この「春慶」とは、瀬戸焼の伝説的な開祖である加藤藤四郎景正の号とされ、景正の作の意味である。また「藤四郎春慶」の場合は、別に息子の二代景正となる。ただしこの「窯分け」と呼ばれる分類は、寛文12年（1672）刊行の『茶器弁玉集』を下敷きに、不昧が『瀬戸陶器濫觴』等の著作で肉付けしたものである。近代以降も『大正名器鑑』等で踏襲されてきたが、科学的な根拠のあるものとは呼べず、近年は発掘調査の結果を反映し、種々の修正を迫られている。

「窯分け」による伝承の通りに加藤景正の作とすれば、本作の制作年代は鎌倉時代となる。当時の瀬戸

図1　瓢箪茶入　銘 閏

図2　同　底の渦糸底

では唐物茶入の模倣こそはじまっているものの、本作のような作行は時期的にそぐわない。景正自身が存在を裏付けられない伝説的な人物でもあるため、昭和戦後期の陶磁器研究において、春慶グループは漠然と室町時代に分類されてきた。そして大きな転機となったのが平成８年（1996）に開催された五島美術館の特別展「遠州の観た茶入」であった。この際に多くの情報が集まり、瀬戸焼茶入の分類の研究は実証性を高めていく。

この瀬戸焼茶入の年代考証を推し進めたのが愛知県陶磁美術館の井上喜久男氏であり、その研究成果では「春慶」と呼ばれる一群を、江戸時代初頭の制作であると位置づけている。この時期は「瀬戸山離散」と呼ばれる瀬戸窯の衰退期であり、瀬戸窯は復興のため、茶入の生産に力を入れたのではないかと推定されている。

当時は戦乱の中で多くの名物茶入が消滅し、その補充が求められる時期であった。特に「名物」と呼ばれた唐物茶入は、その大部分が天正10年（1582）の本能寺の変、慶長20年（1615）の大坂城落城、そして明暦３年（1657）の江戸城火災（振袖大火）で失われている。また江戸では茶の湯が大名家の社交として重要な位置を占めるようになっており、社会的に良質な茶入が求められていた。和物茶入の中でも優れた作品は、寛永期の大名茶人の小堀遠州らによって価値を高められ、松平不昧によって「中興名物」と名付けられるに至った。特に瀬戸焼は先述の「窯分け」によって伝説的価値も付与され、文字通り新しい「名物」となったのである。

なお本作と近い関係と思われる作品に、大徳寺龍光院所蔵の「春慶瓢箪」がある（図３）。胴締めから腰の膨らみにかけての、上辺を長くとる曲線が近似し、また口元の捻り返し、腰の胴紐の入り方、底が渦糸底である点まで共通する。高さは7.2cm、口径3.0cm、底径3.8cmと寸法もきわめて近く、同じ工人による轆轤挽きの可能性も想定される。

図3　春慶瓢箪　大徳寺龍光院蔵

大きな差異は釉薬であり、艶のある深い茶褐色を呈し、その上から黒い釉薬がなだれ、一筋が畳付きで止まっている。釉薬全体は本作よりも上、腰の上部で止まり、その下に見える胎土も緻密で本作に近い。龍光院住持であった江月宗玩（こうげつそうがん）に関連するものと伝えられており、江月の生家である堺の豪商・津田家伝来という屈輪盆（ぐりぼん）が添えられている。

また本作の特徴の一つである渦糸底の作行は、サンリツ服部美術館で所蔵する「春慶文琳」、個人蔵の「春慶口瓢箪」にも酷似している。「春慶」の名前を冠する茶入の中でも、これらを一つのグループとして良いかもしれない。

２　「閏」の次第

茶道具は「次第（しだい）」、つまり附属品等がどれだけ整っているかが評価基準の一つとされ、中でも茶入は充実したものが多い。本作の場合は、まず茶入を納める筒状の容器である「挽家（ひきや）」、これを納める黒漆掻き合せ塗りの「内箱」、そして「内箱」を納める桐木地の「外箱」が中核となる。

この箱が重要な意味を持つのは、そこに所有者や茶人による「書付（かきつけ）」、つまり命名や鑑定の署名が入れられるからである。本作の場合は内箱の蓋表に金蒔絵で、隷書体（れいしょたい）の「閏」の文字が書かれている（図４）。後述する覚書では、この文字を阿部豊後守功山の筆と伝えている。阿部家が豊後守の官位を許されたのは、老中として徳川家光に仕え、武蔵国忍藩（おしはん）（埼玉県行田市）に７万石を領した阿部忠秋が始まりである。以後は同家の極官として複数の代で称しているが、「功山」の号を用いた人物は、現在のところ確認できていない。遠州流の茶人として名前を残している忠秋と孫の正武、この二人が有力候補となる。

『三冊名物集』『中興名物記』等の名物記、『東都茶会記』『大正茶道記』等の茶会記を渉猟した結果、阿部豊後守旧蔵と伝える茶道具として、唐物の「富士山肩

衝」(湯木美術館蔵)をはじめ10点以上の名物が確認される。中でも瀬戸茶入「豊後口廣」(個人蔵)は、阿部忠秋の所持により命名されたものである。その内箱も黒漆掻き合せ塗りとなっており、その蓋表には「口廣」の隷書が朱漆で記されている(図5)。この筆跡は、古筆了仲により「箱書付政武(ママ)之眞蹟也」と極め書きされており、近い時代のものとして信用したい。黒漆塗りの内箱に金蒔絵の隷書で銘を入れることは、小堀遠州の得意とした所であるが、黒漆掻き合せ塗りとするのが阿部家の特徴なのかもしれない。

そして本作内箱と「豊後口廣」の内箱を比較すると、小堀遠州よりもやや謹直な筆遣いが共通しており、本作内箱の筆も正武の可能性が高くなってくる。『大正名器鑑』には、阿部忠秋筆と伝える「玉柏手茶　銘蘆垣」の蓋表の写真も掲載されているが、こちらはやや崩れた隷書で、違う個性の筆跡となっている。

本作の外箱蓋表には、隷書でやはり「閏」の文字が墨書きされ、こちらは松平不昧の筆である(図6)。松江藩領の隠岐諸島で採れた良質の桐材「島桐」に、藤原定家の文字を真似た「定家様」で記す、不昧の独特の仕様を見せている。

この他に「仕覆(しふく)」と呼ばれる袋が3点、象牙製の蓋が2点附属している(図7)。象牙のみならず、袋も「名物裂(めいぶつぎれ)」と呼ばれる輸入織物を使った、極めて高価なものである。

3：「閏」の伝来

茶道具は来歴、すなわち以前の所有者の情報を尊ぶ傾向にある。優れた茶道具の場合、名物記や茶会記から情報を追える。本作の場合は18世紀後半から、比較的豊かな情報を持つようになる。

本作は細川家旧蔵という伝来も持つが、同家の茶道具について記録した「御家名物之大概」(『綿考輯録』所収)、『御参勤江戸御持遣』(永青文庫蔵)、『茶入茶碗写真帖』(永青文庫蔵)には、本作に該当する記録は見られない。また阿部家の箱書きがある道具の大部分は同家の所蔵品でもあるため、阿部家が所持した可能性も想定しなければならないが、現状では保留としておく。

管見の限り最も古い記録は、姫路藩主であった

図4　内箱蓋表(伝阿部豊後守功山筆)

図6　外箱蓋表(松平不昧筆)

図5　「豊後口廣」内箱蓋表
(伝阿部正武筆、『大正名器鑑』より転載)

図7　「閏」附属の袋
左より朝倉間道、龍詰金襴、住吉緞子

酒井宗雅（忠以）の茶会記『遙好日記』、その天明８年（1788）３月16日の記述である。この日、宗雅は江戸屋敷において、松平相模守（鳥取藩主・池田治道）を正客に招いた茶会を催し、茶入に「瓢箪　銘閏　藤四郎」を用いている（註１）。宗雅は寛政２年（1790）に36歳の若さで死去してしまうが、その遺言により、多くの道具が茶の湯の師匠にあたる不昧に譲渡された（註２）。譲渡は何度かに分けられて行われており、『酒井家蔵帖　道具送状』（姫路文庫・姫路市立城内図書館蔵）には、没後12年の享和２年（1802）の第一回譲渡品の二番目に、本作「閏瓢箪」の名前がある（註３）。

入手した翌年、不昧は本作を大坂の豪商である、大眉五兵衛（天王寺屋）へと譲渡した。その経緯については、本作に附属する覚書（図８）と消息（図９）から判明する。まず証書の内容を確認したい。

覚／一閏瓢箪茶入
　袋　龍詰／朝倉漢東／住吉緞子
　蓋　二枚
　茶入目方拾七匁
　箱御銘／阿部豊後守様／御先代功山様御筆
右茶入は始細川家御所持其後酒井／家御所持夫より雲州御家御所持／享和三亥年雲州様御帰国之砌手前所持之縄簾水指御執心ニ付／従御所望御書奉頂戴候ニ付水指／奉献上右為御代り春慶閏瓢箪／茶入奉拝領候
享和三亥年　　五兵衛斐光／拝領

次いで消息の書き下しを挙げる。

先年一瞥いたし候／縄すたれの水さし／所望申度候　余程／損毛に候へとも閏瓢／箪と申茶入を／右代に進上申候　是ハ／中興名物にて候／細川家所持にて昔年／出申春慶ニて候
御一笑　々々
四月二日　弐々斎
天王寺屋五兵衛との

すなわち享和３年（1803）、参勤交代で松江に帰城する途中、不昧は大坂を経由して天王寺屋に立ち寄り、そこで南蛮縄簾の水指を拝見した。そして翌年に江戸に参府した後、大坂へ使者を出して「閏」と南蛮水指を交換したことが読み取れる。

不昧の茶道具リスト『雲州蔵帳』に本作の記録はないのは、編纂された時期が本作の譲渡後のためであった。不昧はわずか一年しか本作を所持していなかったが、その間に桐材の外箱を作る等、次第を自分好みに直している点も確認される。

なお譲渡した相手の大眉五兵衛は、聖徳太子の四天王寺創建に際して材木を調達したと伝える旧家であり、その家柄から大坂経済を取り仕切った「十人両替」の中でも筆頭に挙げられていた。不昧とは茶人として交流関係を持っており、後に雲州松平家を相続する松平直亮は、一時期はこの大眉家に養子に入っている。

その後の「閏」の来歴であるが、天王寺屋は維新後に経営が傾き、明治初年頃に手放したと見られる。そして現在筆者が翻刻を進めている『八百善茶会記』（八百善蔵）からは、明治11年４月に松平瓢々庵が、「春慶閏瓢たん」を使用していることが確認される。「袋　住吉緞子　箱阿部功」と附属品の情報が一致しており、本作と同定して良いだろう。なお未詳の茶人・瓢々庵については、『古今茶湯集』の情報、瓢々庵の蔵品と杵築藩松平家の売り立て目録との照合により、豊後杵築藩（大分県杵築市）の藩主であった松平親良であることが明らかとなっている。

同じく『八百善茶会記』では、明治18年５月22日に大審院検事長を務めた渡邊驥（無物庵）が本作を使用

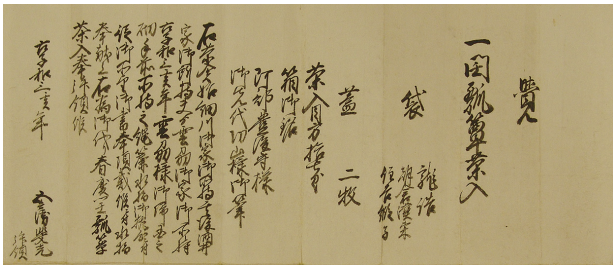


図8　「閏」附属の覚書（大眉五兵衛筆）

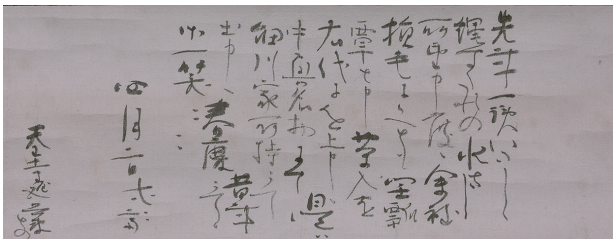


図9　「閏」附属の消息（松平不昧筆）

している。松平と渡邊は茶友として交流があり、名品を蒐集していた渡邊が譲ってもらったのだろう（註４）。明治29年に渡邊が大規模な売り立てを行うと、この際に落手したのは実業家で数寄者として知られた赤星弥之助であった（図10）。さらに大正６年（1917）10月８日の「第二回赤星家所蔵品入札」において、滋賀県長浜の実業家である二代浅見又蔵（慶雲）が３万4,300円で落札した。『大正名器鑑』を編纂した高橋義雄（箒庵）は、本作をこの浅見家において実見している。そして浅見家も昭和３年（1928）９月24日に入札会を行い、おそらくこの際に遠山元一に渡った（図11）。昭和11年10月11日の遠山邸新築記念園遊会では、高野切と共に本作が濃茶席の主役となっている（図12）。

以上、「瓢箪茶入　銘 閏」について考察してきた。かつては室町時代のものとして扱われてきたが、近年の瀬戸焼研究は、この見方の修正を迫っている。本作の端正さを追求した姿形は、江戸初期の時代相から生みだされた、極めて近世的な造型と見るべきだろう。また松平不昧とその前後の来歴が判然と証明でき、近世の大名茶の世界を照らす、茶道史的にも意義深い史料と位置づけられる。本作を一年しか所持しなかった不昧が、その編著である『古今名物類聚』では自身の所持品としては扱わず、弟子の宗雅の蔵品として記録した点、それが本作にまつわる重要なドラマであったと言えるだろう。

（当館学芸課長）

註１　『酒井宗雅茶会記』118頁

註２　『大正名器鑑』では酒井家から一度京都の市場に出た後に不昧が購入した様に記すが、これは『古今名物類聚』の記述の誤読である。原典では、宗雅が京都において購入したとしている。

註３　従来、本作と「即色茶入」（根津美術館蔵）、「一休江口の文」の計３点については、実際に譲渡されたのは、宗雅の十七回忌後の文化３年（1806）とされてきた。しかしこの点については、天王寺屋から一時持ち出されていた可能性を含め、再検討を要することになる。

註４　『大正名器鑑』は同じ茶会を明治17年５月24日として紹介しているが、これは引用元である『古今茶湯集』が、編纂過程で写し間違いをした可能性がある。

図10　総箱に貼られた赤星家の蔵印

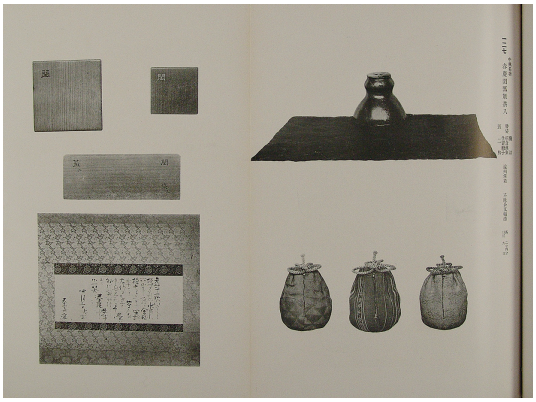


図11　『江州浅見家所蔵品入札目録』京都美術倶楽部、昭和3年9月24日（東京文化財研究所蔵）

図12　『遠山家本宅新築落成記念写真帳』（当館蔵）
西棟7畳間の飾り付け、点前座に本作が飾られている。

基本参考文献

山本麻渓・木全宗儀『古今茶湯集』慶文堂書店、1917
高橋義雄『大正名器鑑』大正名器鑑編纂所、1923
松平乗邑『三冊名物集』秋豊園、1934
加藤唐九郎「校註茶器弁玉集」『茶道全集』8、創元社、1936
高橋梅園「瀬戸陶器濫觴」『茶道全集』15、創元社、1936
斎木一馬・高柳光寿『寛政重修諸家譜』続群書類従完成会、1964
粟田添星『酒井宗雅茶会記』村松書館、1975
土田將雄・今谷明・石田晴男編『綿考輯録（忠興公）』出水叢書、1988
五島美術館編『遠州の観た茶入』五島美術館、1996
射矢真紀「翻刻 姫路酒井家宝器明細簿 乾・坤」『姫路美術工芸館紀要』2、2001
山梨県立美術館編『大名細川家の至宝　文武の歴史と雅の文化・永青文庫名品展』山梨県立美術館、2001
井上喜久男「瀬戸茶入の製作年代」『野村美術館研究紀要』13、2004
竹内順一「やきものの風景(37)瀬戸茶入の時代」『茶道の研究』（通号 602）2006
茶道資料館編『姫路藩主酒井宗雅の茶と交遊』茶道資料館、2012
井上喜久男「考古学から見た名物瀬戸茶入」『陶説』（726－754）2013－2016
三井記念美術館・島根県立美術館編『大名茶人松平不昧』三井記念美術館・島根県立美術館、2018
木塚久仁子『松平不昧―名物に懸けた大名茶人（茶人叢書）』宮帯出版社、2018

「瓢箪茶入　銘 閏」の伝来

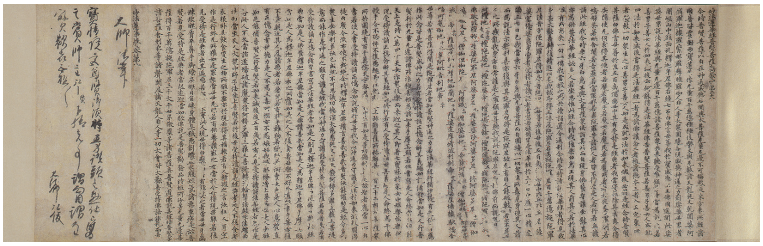
17世紀末頃　阿部正武（功山と号したか）？
（箱書からの推定で、確認はとれず）
↓
18世紀前半　細川家？
（『古今名物類聚』等の情報のみで、確認はとれず）
↓
18世紀後半　酒井忠以（宗雅）
（『古今名物類聚』によれば京都で購入）
↓
享和２年（1802）　松平治郷（不昧）
（酒井家から宗雅の遺品として譲渡される）
↓
享和３年（1803）　大眉五兵衛（天王寺屋）
（不昧からの要請で南蛮縄簾水指と交換する）
↓
明治10年（1877）頃　松平親良（瓢々庵）
（天王寺屋の没落により明治初年に流出と推定）
↓
明治18年（1885）頃　渡辺驥（無物庵）
（瓢々庵から譲渡されるか？）
↓
明治29年（1896）　赤星弥之助
（渡邊驥の売り立てで購入）
↓
大正６年（1917）　浅見又蔵（慶雲）
（赤星弥之助の売り立てで購入）
↓
昭和11年（1936）　遠山元一
（浅見家の売り立てにて購入か？）

※なお本稿の執筆にあたっては、行田市郷土博物館の澤村怜薫氏、東京芸術大学名誉教授の竹内順一氏、茶道資料館の橘倫子氏、大阪歴史博物館の中野朋子氏、同志社大学の矢野環氏に御教示を賜った。ここに感謝の意を述べたい。

春季館蔵名品選

4月2日(火)～5月6日(月・祝)

遠山記念館は、昭和45年(1970)の開館以来、貴重な文化財の収集・保管に務めてきました。本展では館蔵の名品の中から、弘法大師筆と伝えられる重要美術品「法華経普賢菩薩勧発品」、岡本秋暉の秀作「桜花雉子図」、古代中国の青銅器「饕餮文尊」を中心に展示いたします。また併せて、寄贈を受けた遠山元一ゆかりの作品を紹介します。



左上／伝弘法大師　法華経普賢菩薩勧発品　平安時代
右上／岡本秋暉　桜花雉子図　江戸時代
右下／紫地藤扇模様単衣(吉田貞子旧蔵品)　昭和時代

茶道具と華布

5月18日(土)～6月30日(日)

華布－かふ－とは、主に綿布に花鳥や人物・動物等の文様を色鮮やか染めた布、「更紗」の異名です。その発祥の地インドでは4,000年以上前より染技術が発達し、海外への輸出も2,000年ほど前には始まっていたと考えられています。

インドから運ばれた軽やかな木綿の染布は各地の染織文化に多大な影響を与え、とりわけ16～17世紀にヨーロッパへの輸出が盛んになると、絹や毛織物が主流であった当時の服飾界に革命的なブームを巻き起こしました。

日本にも室町時代以降、インドやインドネシアなどの染布が数多く輸入され、その異国的な雰囲気はたちまち人々の心をとらえました。この染布を日本では「更紗」、「華布」などと呼び、衣料や小物、布団地、茶道具の包み布等様々な用途に珍重してきました。

今回は館蔵の茶道具とともにインド、インドネシア、イランの更紗、そして日本で染められた「和更紗」を展覧します。華やかな文様を生み出した文化的背景に思いを寄せつつ茶の湯の雰囲気を味わってみてください。

①

②

④

主な出品作品

① 手描・木版型染布　クリシュナ図　　インド 17－18世紀
② ろうけつ染腰衣　鳥獣・草花文様　　インドネシア ジャワ島 19－20世紀
③ 肩衝茶入 銘 大嶋　古瀬戸　名物　　日本　15世紀
④ 釘彫伊羅保茶碗　銘 綵雲　　朝鮮　17世紀　ほか

遠山記念館のオリエント美術

7月13日(土)～9月1日(日)

昭和45年(1970)、遠山記念館の開館にあたり、初代館長に就任したのが、オリエント美術の研究者として知られた新規矩男(あたらしきくお)でした。創設者である遠山元一も開館前後にオリエントの蒐集をはじめ、その中にはファラオをかたどった中王国時代の「王座像」、美しい彩色の残る新王国時代の「供養碑」など、優れた作品が含まれています。また遠山元一は、エジプトやイランで制作された、古代オリエントのガラス製品も蒐集しました。昨年度は東京理科大学の協力で蛍光X線調査を行っており、その学術研究の成果を併せて紹介いたします。

供養碑　エジプト　前16－前11世紀

王座像　エジプト　前22－前18世紀

カットガラス円文様碗　イラン　6－7世紀

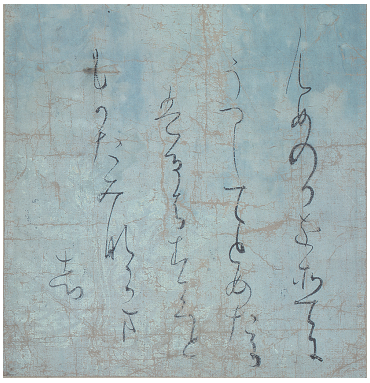
木葉文様金垂飾　イラン　前10世紀頃

特別展予告

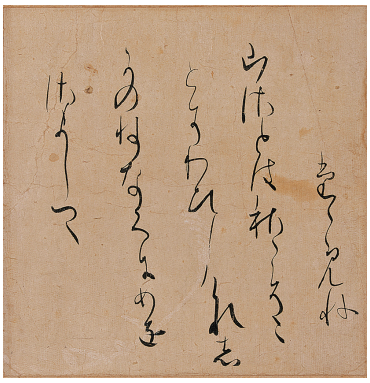
古筆招来　高野切・寸松庵色紙・石山切

9月14日(土)～10月20日(日)

平安時代の仮名書を代表する高野切・寸松庵色紙・石山切は、仮名を手習いされている方、勉強をされている方は皆さんご存知の名筆です。遠山記念館ではそれぞれを所蔵しており、もとは同じ巻物、冊子の連れであった作品を招来して展観します。特に、個人のご所蔵家からお借りする「伝紀貫之 寸松庵色紙 山ざとは」(右図)と、「伝藤原公任 石山切伊勢集 しるらめや」の2点は、30年ぶりの展覧会出品となる待望の品で、関東での披露は初めてになります。どうぞご期待ください。



寸松庵色紙　当館蔵



寸松庵色紙　個人蔵

2019年度 前期 催し物

【土曜講座】遠山記念館の名物茶入

日時： ４月20日（土）　午後１：30～３：00
会場： 事務棟地下会議室
定員： 80名（事前予約不要）
参加費： 入館料とは別途、300円
担当： 依田徹（当館学芸課長）

徳川将軍家伝来の大名物「文琳茶入 銘 玉垣」、松平不昧ゆかりの中興名物「瓢箪茶入 銘 閏」など、遠山記念館で所蔵する名物茶入について、その歴史背景からご紹介いたします。

文琳茶入　銘 玉垣

旧遠山家住宅 重要文化財指定記念 シンポジウム

日時： ４月28日（日）　午後１：30～４：40
会場： ウエスタ川越　多目的ホールABC（川越市新宿町１－17－17）
定員： 200名（申し込み不要）
参加費： 無料
プログラム：

午後１：30～　挨拶　　遠山公一 当館理事長
　１：50～　講演１「近代和風建築の精華―旧遠山家住宅とは―」
　　小出祐子氏（建築史研究者・遠山邸建築調査委員）
　２：20～　講演２「遠山邸にみる近代数寄屋の意匠と大工の技」
　　矢ヶ崎善太郎氏
　　（数寄屋建築研究者・遠山邸建築調査委員）
　２：50～　休憩（20分）
　３：10～　講演３「文化財建造物の保存・活用の歴史と理念」
　　高階秀爾氏（大原美術館館長・東京大学名誉教授）
　３：50～　討議
　　司会　宗本順三氏（京都大学名誉教授・遠山邸建築調査委員長）と上記の講師皆様

2018年に遠山邸（旧遠山家住宅）が国指定の重要文化財となりました。これを機会に、さらに多くの方々に近代和風建築を代表する遠山邸の奥深い魅力を知っていただくため、美術、建築専門家による講演会と討議の会を開催いたします。

《旧遠山家住宅バスツアー》

シンポジウム開催日の午前中に、実際に遠山邸を案内付きで１時間ほど見学し、川越へ戻るバスツアーを用意いたしました。

集合場所： 東武東上線・JR川越線　川越駅西口 ウエスタ川越前
集合時間： ４月28日（日）　午前９：40
定員： 45名　　**参加費：** 1,000円
お申し込み： TEL 049-297-0007　メール tkkk@e-kinenkan.com

●レトロな空間で、ノスタルジックな音楽を

手回し蓄音機によるSPレコード鑑賞会　Part 24

日時：５月３日(金・祝)　午後１：30～２：30
会場：遠山邸中棟大広間
定員：50名(先着順)
参加費：入館料のみ

和風建築の技術の粋を集めて昭和初期に建てられた、遠山邸の大広間で、SPレコードの鑑賞会　Part24を行います。SPレコードは、かつて音楽を記録する唯一のメディアとして一世を風靡しましたが、やがてLPレコードの出現によって姿を消しました。しかしながら、SPレコードでしか聴くことのできない演奏があります。貴重な記録の中から、クラシック曲や童謡・唱歌などを聴く予定です。電気を一切使わず再生されるノスタルジックな音をお楽しみください。なお、ご自宅に、SPレコードをお持ちの方は、当日お持ち頂ければ、飛び入り再生も受け付けます。

「遠山記念館 友の会」入会のご案内

「遠山記念館 友の会」は、遠山記念館を何度も訪れたいという方や、邸宅・庭園および美術館の活動やイベントに積極的に参加したいという方のための集まりです。皆様のご入会を待ちしております。

会員特典
1．会員証の提示により、同伴者１名様まで一年間何度でも無料でご入館いただけます。
2．展覧会やイベントなどを掲載した「遠山記念館だより」をご送付いたします。
3．次の有料イベントへのご参加が無料となります。
- 建築の専門家による講演会「遠山邸研究会」
- 当館コレクションについて外部研究者にお話をいただく「講演会」
- 当館学芸員の研究テーマをわかりやすく解説する「土曜講座」
- 遠山邸の座敷にて、当館コレクションを直にご覧いただく「お座敷美術講座」

4．当館主催のお茶会(雛祭りの茶会、端午の節句茶会等)の席料が半額となります。
5．当館の出版物、ミュージアムグッズを２割引でお求めいただけます。

年会費：3,000円　**有効期間**：入会月より１年

申し込み方法

同封の入会申込書に必要事項をご明記の上、遠山記念館までご郵送、もしくはＦＡＸをお送りいただくと共に、同封の払込取扱票に、住所・氏名・電話番号をご記入の上、年会費3,000円の払い込みをお願い致します。

ご入金の確認後、追って会員証を送付いたします。領収書は会員証の送付を以て代えさせていただきます。ご利用の有無に拘らず、会費の払い戻しはいたしません。

送り先：〒350-0128　埼玉県比企郡川島町白井沼675　　公益財団法人 遠山記念館　　担当　松村
TEL 049-297-0007　FAX 049-297-6951

2019年 前期　遠山邸2階　特別公開日

4月7日（日）・5月18日（土）・6月1日（土）
午前11：00～午後３：00

遠山邸２階の和洋折衷の洋間応接室、寝室、及び12畳間座敷の特別公開を、上記の日程で行います。アールデコの照明具や、オパールガラスが作り出す昭和モダンのデザインと、伝統和風建築の意匠が違和感なく融合されていて、上品で独特の雰囲気が感じられます。２度目、３度目の方も、気付かなかった新しい発見があるかもしれません。

遠山家端午の節句飾り

4月17日（水）～ 5月6日（月・祝）

遠山元一が長男一行（大正11年生まれ）の初節句の祝いとして揃えた、端午の節句飾りです。毎年、雛壇飾りと同様、遠山邸の中棟大広間の次の間に飾られます。人間国宝の二代平田郷陽や京都の大木平蔵など名工の作品も含まれ、鎧兜を中心に、鍾馗、神武天皇、日本武尊、応神天皇、源為朝、加藤清正、本多忠勝など勇猛な姿の人形や飾り馬、また金太郎をはじめ、子どもの姿を表した愛らしい人形などが並びます。

利　用　案　内

◇入　館　料

期　間	一　般	学　生
特別展	1,000円	700円
通　常	700円	500円
美術館閉館時	500円	300円

※中学生以下は無料、団体20名以上は2割引きとなります。

◇開　　館　午前10:00～午後4:30
（入館は午後4：00まで）

◇休　館　日　月曜日（月曜が祝日の場合は翌日）
3月26日（火）、4月16日（火）、5月8日（水）

◇邸宅・庭園のみ公開
5月9日（木）～5月17日（金）
7月2日（火）～7月12日（金）
9月3日（火）～9月13日（金）

◇詳しい展覧会情報は下記をご覧ください。
URL http://www.e-kinenkan.com

電車・バスでのご来館の場合
- 東武東上線・JR埼京線　川越駅
- 西武新宿線　本川越駅　●JR高崎線　桶川駅
  いずれも「川越駅－桶川駅」間の東武バスで牛ヶ谷戸（うしがやと）下車、徒歩15分

お車でのご来館の場合
- 圏央道川島ICより7分
- 川越方面から国道254号線の宮元町交差点を川島方面へ右折、釘無橋を渡り最初の信号を左折、案内板に従って約10分

遠山記念館だより　第56号
2019年３月 発行
編集発行　公益財団法人 遠山記念館
編集担当　依田　徹

〒350-0128 埼玉県比企郡川島町白井沼675
TEL 049-297-0007
FAX 049-297-6951